

人類的課題と仏教

川田洋一

(一)「三つの次元」の危機

二十一世紀を目前にして、地球人類の直面している課題を取り上げ、その克服に向けて、仏教がいかなる役割を果たしうるかについて論じていきたいと思えます。

現在の人類的な危機を、自然界、人類社会、人間内界——即ち精神界の三つの次元に整理してみると、次のようになります。

第一の次元は、地球生態系の危機であります。地球生態系は、人類の生存の基盤であり、「ガイヤ」としての

地球が、四十数億年かけて築きあげてきた、まさに、「生命的存在」であります。人類をはじめとして、生きとし生けるものが相互に関連しながら、創造的進化をとっている事実を、生態学が的確に指摘したのは、二十世紀に入ってからであります。

それまで、近代西洋に発した科学技術文明は、自然支配の思想のもとに、地球生態系を切断し、自然からの搾取を繰り返してきたのであります。その結果、オゾン層の破壊、海洋汚染、砂漠化の進行、熱帯雨林の破壊と生物種の激減から、広範囲の放射能汚染に至るまでの「グ

ローバル・イシュー”を噴出するに至り、“母なる地球”——“ガイア”そのものを破壊に追い込もうとしております。

さらに、二十一世紀にかけての人口激増、食料不足、経済格差による貧困の拡大が重複すれば、一段と生態系の破壊に拍車がかかることとなります。現今、“自然との共生”の思想と生き方が求められる所以であります。

第二には、人間社会の次元における課題であります。ポスト冷戦の世界システムは、ますます、相互依存の度を深めております。今世紀後半に入ってから、画期的な情報・通信技術の革新、運輸手段の改善により、人類社会は、密接な相互依存から、一体化の方向へと進んでおります。

また、経済的相互依存は、世界市場経済へと進展しつつあり、金融面においては、世界の同時進行といった感を呈しております。国家の他に、多くの非国家主体の活躍が目立っており、国家と非国家主体、非国家主体間のネットワークが形成されております。多国籍企業やNGOは、すでに国家の枠を超えて、人類次元で活躍してお

ります。軍事的相互依存の面においては、軍事技術の進展が、国境の意味を全く変え、国家間の“脆弱性”を極めて高いものにしております。

このような情報、運輸、経済、軍事等の多方面にわたる“相互依存”の網が、一面では、大国間の戦争を防ぎ、核戦争の脅威を減少化させております。

しかし、一方、文化の相違による紛争の激発、文明間の激突が懸念される状況にもなってきました。事実、異なった民族、文化、宗教、人種間の紛争が、地球上のいたるところで起きており、極度の貧困とテロが紛争に拍車をかけております。その影響もあって、先進諸国においては、難民の流入、外国人労働者の問題、それに刺戟されての人種差別、民族紛争が生起しております。

各民族の文化が、宗教を“核”にして形成されてきたことを考えれば、宗教、特に、世界宗教に課せられた役割は、極めて重大といわねばなりません。

第三の次元は、人間内界——精神界の混迷・衰退であります。先進国、開発途上国を問わず、暴力と腐敗が蔓延し、麻薬、エイズの流行、性道徳・倫理性の低下は、

目をおおいたくなるほどです。このような現象は、国家、社会、民族、教育環境、家庭のいたるところに生じております。特に、憂慮すべきは、家庭の破壊であり、地域共同体の崩壊であります。

先進国では、いわゆる“心の病”が増加し、ノイローゼ、うつ病をはじめとする種々の精神病が増加しております。家族、地域共同体によって培われてきた愛情、信頼や生きがいを失った人々は、孤独感にさいなまれております。荒廃し、砂漠化した人々の心の中に、日本のオウム真理教のようなカルト集団が入り込み、狂気の世界へと転落させてゆくのであります。

慈愛・非暴力と信頼と勇氣に満ちた豊かな人間性と、強靱な精神力を、どのようにして養い、本源的な生命エネルギーを蘇生させゆくか——宗教の根本命題が、ここにあります。

(二) “煩惱の火”

“三つの次元”にわたる人類的危機の基底に、仏教は、人間生命に内在する“煩惱の火”を洞察しております。

“煩惱の火”は、個人の心の深層から、民族、国家、人種等の集団的深層意識へとげしく燃え広がっていきま

す。かつて釈尊は、新しい弟子とともにガヤーシーサ(伽耶山)に登ったことがあります。山上に立った釈尊は、「比丘たちよ、すべては熾然として燃えさかっている」と説き始めました。この“ガヤーシーサ”での説教は、イエス・キリストの“山上の垂訓”に比して、ヨーロッパの学者によって“山上の説法”と名付けられるものであります。

「比丘たちよ、それらは何によって燃えているのであろうか。それは、貪欲の焰によって燃えており、瞋恚の焰によって燃えており、愚痴の焰によって燃えているのであり、また、生・老・病・死の焰となって燃え、愁・苦・悩・悶の焰となって燃えているのである」。

煩惱の火が、現象世界の一切を燃やしているのが、人間世界のあり方であり、貪欲・瞋恚・愚痴の焰が、すべての人々の心の中に燃えさかっている。そのために、す

すべての言動が苦悩の色に染まってくるというのであります。この説法は、新たな弟子の心を揺り動かし、『法華経』の作者によっても、「三界火宅の譬」として結晶したのであります。

「是の諸の衆生、まだ生老病死、憂悲苦悩を免れずして、而も三界の火宅の為に焼かる。」

ここに、貪欲とは、物質、財産、権力等への執着をさしており、この種の欲望は際限なく増幅していくとされしております。

瞋恚とは、自己中心性がかなえられない時におきる「怒り」、「怨み」や「嫉妬」であり、激してくると「害」——暴力として噴出します。つまり、瞋恚とは、エゴイズムから発する暴力性のことであります。

愚痴は、宇宙と生命の「真理」——「実相」に暗く、したがって、宇宙の「真理」への反逆へとおもむく煩惱であります。宇宙の「真理」に明るい智慧の光を「明」と呼び、この光明をおおう煩惱である故に、愚痴を「無明」ともいいます。「無明」は、すべての煩惱の根源となるものであります。

なかに歴史的な怨念や暴力性が刻印されていくというのであります。そして、最後には、その時代の全人類をおおい、劫濁となると指摘するのであります。

天台が示すように、今、貪欲性は、個人にとどまらず、人類的規模において、民族や国家間の経済「格差」を生み出しております。先進諸国の貪欲性が、他の貧しい国々の「基本的ニーズ」さえ奪い去っております。また、人類の貪欲性が、日々、他の生物の「生存権」を奪っております。

暴力性も、家庭や教育の現場、地域社会において噴出しているのみならず、歴史性を帯びた「怨念」が、部族、民族、人種間の紛争を引き起こしております。ある場合には、宗教に結びついたテロ行為として突発している現況であります。

愚痴即ち無明性は、宇宙と生命の「真理」への反逆性を意味していますから、個人のライフスタイルから、家族、民族、国家の価値観、自然観の「狂い」として顕現するのであります。換言すれば、自己を生かすものへの「反逆」、宇宙と生命への「反逆」を引き起こす生き方、

仏教では、貪欲・瞋恚・愚痴を三毒とも称しております。この三毒をはじめとする煩惱が、個人の生命から激発されて、家族、部族、民族、人類をおおいつくしていく様相を、『法華経』では、「五濁」の法理として説き示しております。

「舍利弗、諸仏は五濁の世に出でたもう。所謂劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁なり」

中国の天台は、五濁の次第を次のように述べております。

「次第は煩惱と見とを根本と為す。この二濁より衆生を成す。衆生より連持の命有り。此の四、時を経るを謂て劫濁と為すなり」。

煩惱濁とは、三毒等の煩惱をさします。換言すれば、貪欲性、暴力性、無明性の煩惱であります。見濁とは、特定のイデオロギーへの執着であります。天台は、この煩惱濁と見濁が根本にあり、個人から衆生社会へとあふれでる、そこに、家族、部族、民族、国家といった各段階の衆生社会が濁ってくる。その濁りが、世代を超えて受け継がれていくことにより命濁となり、民族や国家の

自然観、価値観の底に、無明性を見るのであります。

現代文明は、物質至上主義といい、自然の支配から搾取への転落といい、消費至上の生き方といい、その内部に「無明性」が濃く刻印されているといわざるをえません。特定のイデオロギーへの執着（見濁）による激突は、ポスト冷戦をむかえた今日ではひとまず終焉を迎え、さまざまな紛争の原因は煩惱濁に深く関わるようになってきております。しかし、仏教では、見濁よりも、煩惱濁のほうが、生命の深層に根差しており、その克服は極めて困難であるといえます。

仏教的に表現すれば、今日の時代状況は、まさに、五濁にそまつた悪世——地球という「ガイヤ」とともに人類「種」そのものが絶滅の危機に直面した「末法」の様相を呈しております。

(三)「地球倫理」の形成

五濁として、現代文明に内包された「煩惱の火」をどのように昇華して、仏の智慧と慈悲に変えていくか——釈尊以来の仏教の修行は、ことごとく、この一点に定め

られておりました。日本の日蓮は、大乘仏教の立場から「煩惱の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり」と表現しております。

さて、すべての仏教にそなわる特質を、「戒・定・慧」の三学という基本法理として示すことができます。戒律と禪定（瞑想）と智慧であり、その次第は、戒律と禪定による修行を重ねることによって、智慧を得るのであります。

「煩惱」は戒律によって制御され、禪定によって深められつつ、智慧の顕現をともなつて、「菩提の慧火」へと昇華されゆくのであります。

仏教各派によって、修行の形態はさまざまですが、しかし、最初は、戒律を守ることにによって煩惱を制御する修行に入っていくこととなります。また、「戒律の「戒」は、出家・在家を問わず、人間として守るべき倫理を基盤にしております。つまり、在家の人々にとっては人間倫理であり、同時に社会倫理でもあります。また、この仏教の「戒」のなかには、キリスト教やユダヤ教、イスラム教、さらには、儒教、道教等の東洋の宗教とも共通

する倫理性も包含されております。

そこで、私は、人類のための宗教協調の一つの柱として、次のような四項目の基本倫理を提示し、二十一世紀に向けての「地球倫理」形成のための基盤としたいのであります。

第一には、「生命の尊厳」であります。仏教の戒としては、「不殺生戒」となります。この戒は、瞋恚の克服を目指すものであります。大乘仏教においては、非暴力・慈悲の実践を意味します。仏教では、人間をはじめとする生きとし生けるものは、「仏性」という尊厳なる生命を内包しているゆえに、尊厳なるものとして扱わなければならないと主張します。

この「戒」からは、一方では「平和権」が成立してきます。あらゆる戦争を防止し、軍備を縮小し、廃止へと導いていく「不戦」への権利であります。経済も軍需から民需への構造転換が要請されます。あらゆる紛争は、非暴力的・平和的に解決すべきであります。また、家庭でも学校でも、非暴力・慈悲の教育が中核に据えられなければならない。

さらに、この戒を、生きとし生けるものへと拡大する

と、「自然生存権」の主張となります。生きとし生けるものは、それ自体で尊厳であり、生を享受する価値をもつ存在であります。人間は、このような態度で自然に接し、生態系と共存すべきであります。したがって、人間の活動は、できれば、生態系の復元力のなかで行うべきであります。それでも、生態系を傷つけたところについては、人間の英知をつくして回復し、科学技術等も応用しながら、自然の修復につくすことあります。

第二には、「公正な経済秩序」をつくることあります。仏教の戒としては、「不偷盜戒」として守られております。この戒は、貪欲のコントロール、即ち、「少欲知足」の生き方をさし示しております。したがって、この戒は、自分の貪欲のために他者を搾取することを禁じております。

先進諸国や多国籍企業が、詐欺同様の方法で開発途上国の人々を搾取するのは、まさしく「偷盜」にあたります。また、先進国の人々の貪欲なる消費生活のために、未来の人々の資源を奪うことも「偷盜」になります。

他者のものを盗まないとは、地球上のすべての人々が、貧困から脱出できるように、「公正なる経済秩序」

をつくりだすことです。地球上に、大多数の貧困の人々がいることに無関心であること自体が、「偷盜」にあたります。地球的規模の市場経済が進んでいる現状であるからこそ、政治家、企業家をはじめ、すべての人々に「他者のものを盗まない」という倫理性が要請されるのであり、地球的規模の「公正なる経済秩序」の確立への努力が義務となるのであります。この行為こそ、仏教でいう「布施」行であります。

第三には、「男女・人種・民族・文化の平等」であります。仏教では、「不邪淫戒」として、ジェンダーの問題に焦点をあててきました。世界中のいたるところに、父権主義、女性への差別、子どもの虐待、また、民族、人種への偏見、文化的偏見等が見出されます。このような差別意識は、宇宙と生命の「真理」に無知なる「無明」から生じてくると、仏教では考えております。宇宙と生命の「真理」を、仏教では、「縁起の法」として説き示しております。つまり、すべての存在は、互いに依

存しあっており、助けあって生きていかなければならぬ。そのような生き方こそ、「真理」に即した人生であると主張するのです。

男性と女性は、互いに愛し、尊敬しあい、平等なる存在として助けあうべきであります。また、子どもも、一個の尊厳なる人格として対応すべきであります。「縁起の法」からすれば、すべての民族、人種は、それぞれの独自の文化・宗教をもっており、互いに尊敬し、信頼しあって生きていくべきであります。異民族、文化、宗教の間の紛争を、このような「平等観」によって克服するための「戒」といえます。

第四に、「真理を語る」ということであります。仏教では「不妄語戒」として示し、妄語、綺語、悪口、両舌を語るべきではないとしております。綺語とは、真実にそむいてたくみに言葉を飾りたてることであります。これらは、すべて、三毒から出てくるといえます。

仏教では、この「真実」とは「真理」の意味をもってあります。宇宙と生命の「真理」から出てくる言葉や行動こそ、「真実」であります。これを「正語」とか「愛

語」とか表現します。政治家や企業家や、一部のマスコミ等の虚偽、虚報、欺瞞、偽善、煽動等を禁ずる「戒」であります。

人間としての他者への信頼感とは、「真実を語る」ところに生まれるのであり、国家や民族間の「信頼醸成措置」への努力も、この「戒」の実践化といえます。この信頼感とは、家庭教育にはじまり、学校教育によって培われるものであり、「真実」を語り、「真理」にのっとって生きる生き方を学ぶことが肝要であります。

以上の四項目は、世界のいかなる人にも共通するものであり、また、要請しなければならない人間としての「基本倫理」であり、「地球倫理」の基盤となるべき「道徳言語」であると思えます。宗教者こそ、この「道徳言語」をもって世界を語るべきでありましょう。

(四) ライフスタイルの変革 ——菩薩としての生き方

最後に、仏教者の目指す人間の生き方について述べたいと思えます。第一章に述べた、人類的危機の「三つの

次元」に即して、仏教者は、どのような意識をもち、価値観をもって、「グローバル・イシュー」に立ち向かうとしているのか、といった点に焦点を当てたいのであります。

第一には、「大自然との共生」であります。地球生態系の破綻を防ぐには、すべての人々が、自然支配の思想を脱却し、人間も自然界の一員として共生すべき存在であるとの意識変革をなすことあります。

科学技術の応用も、大自然の本源的能力を回復させ、あるいは強化する方向へと向けられるべきであります。それとともに、特に先進諸国の人々にとっては、貪欲による消費主義、物質主義を反省し、大自然のなかで憩い、宇宙の神秘にふれ、精神的充実感を味わうゆとりのある人生こそ、「真理」に基づく人間の生き方であることを、再認識すべきであります。

極貧のゆえに、やむをえず大自然を傷つけている状況には、先進諸国の人々は、経済的、人道的な奉仕行為を惜しまず、ともどもに「持続可能な開発」に努力すべきであります。

第二の人類社会の混迷、特に、現今の部族、民族、宗教間の紛争に対しては、「寛容の精神」が要請されます。「寛容の精神」は、先ほど述べた、人間としての「基本倫理」によって培われていくものであります。非暴力・慈悲の精神、貪欲のコントロール、平等の精神、そして、「真実」を直視し、語る勇氣が「寛容の心」を養っていくのであります。

それとともに、仏教では、「縁起の法」という認識面からの意識変革をも要請しております。「縁起の法」とは、先ほど述べましたように、現象界のすべてのものは、互いに依存しあい、助けあって生きていくという「真理」であります。この「真理」を洞察するならば、いかなる民族も、文化も、人類も、宗教も、それぞれの存在意義をもっているのです。互いに、それぞれの特徴を認めあい、尊敬の念をもって対応すべきなのであります。

日本の日蓮は、この現象界のあり方を、大自然の美しさとえとして表現しております。「桜梅桃李」の法理といえます。桜は桜、梅は梅というように、美しさは異

なり、花の咲く季節も異なり、人間や他の存在物との関係性も異なっている、それぞれが、宇宙と生命の「真理」を体現しており、それ自体で尊厳なる存在であると見るのであります。このように、宇宙万物は、それぞれのあり方で「真理」を表現しているのですが、人間は、「自由意志」によって、かえってこの「真理」に反逆する行為を犯してしまうのであります。そこに、暴力性、貪欲性、無明性という三毒が生起して、「グロバル・イシュー」を引き起こすのであります。しかし、いかなる民族も、文化も、宗教も、三毒を菩提——善心——に変革すれば、深く「真理」に根差し、それぞれのあり方で、「真理」を表現しゆくことが明らかになるのであります。ここに、仏教者から見た「文化多元主義」「宗教多元主義」の本質的意義があり、「寛容の心」の源泉があります。

したがって、宗教者の相手は、まず、自身の煩惱であり、同時に、他者——個人、家族、社会、民族、国家、企業、マスコミ等——から発現する「三毒」への挑戦であります。この挑戦を通して、「寛容の精神」に基づく

「人類平和」への共戦を押し進めることであります。

第三には、「魂の救済」であります。各宗教によって独自の理論と経験と方法があると思いますが、仏教においては、人間生命に内在し、しかも宇宙の「真理」へと超越しゆく「聖なるもの」としての「仏性」の発現に焦点が当てられております。「戒・定・慧」の三学でいえば、戒律と禅定の修行による仏の智慧の開発であります。一般的にいえば、人間生命に内在する無限の可能性を開発し、「真実の自己実現」の道を歩むことであります。

この「真実の自己」とは「真理」であり、「縁起の法」でありますから、自己実現は、他者との関係性のなかにおいてしか成就しないのであります。他の人々とともに、苦悩に共感し、乗り越えつつ、三毒を克服しゆく挑戦のなかに、自身の「自己実現」も可能になるのであります。自他ともに「真理」の体現を、仏教では、菩薩道として描きあげております。仏教による「魂の救済」とは、非暴力・慈悲・智慧、強靱な意志力の発現する菩薩の生き方を意味するのであります。この菩薩の生き方

は、他の世界宗教にも共通する要素を多くもっており、その接点においても、人類生存への協調が可能ではないでしょうか。

以上、仏教の視座より、人類的課題に関わり行く世界宗教の「協調のあり方」について述べさせていただきます。

(かわだ よういち・東洋哲学研究所長)

(本稿は一九九七年五月三十、三十一日に行われた当研究所口シア・センター開所記念シンポジウムでの講演原稿です)